

松下国際財団 研究助成 研究報告

【氏名】朝田 郁

【所属】(助成決定時) 京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科

【研究題目】スワヒリ・コーストにおけるアラブ移民ハドラミーのネットワーク

【研究の目的】

本研究は、東アフリカ海岸地帯に暮らすイエメン系アラブ移民のコミュニティにおいて、彼らの国境を超えた人的、物質的、文化的ネットワークを実現しているシステムを明らかにすることを目的としている。

インド洋においては、モンスーンを利用した海洋交易によって紀元前後よりアフリカ、インド、アジアが結びついていた。スワヒリ・コーストと呼ばれる東アフリカ海岸地帯もまた、この交易ルートの中に組み込まれている。特にアラビア半島南部との間には、アラブ人ムスリムによって密な交渉があり、ハドラミーと呼ばれるイエメン東部ハドラマウト地方出身のアラブ移民が、東アフリカ海岸地帯に多数移住している。

ハドラミーは商人やイスラーム法学者、神秘主義教団員として、移住先社会のイスラーム化に寄与した。そのコミュニティはインド洋海域各地にあり相互に連携している。彼らのネットワークは研究上の関心を集めており、本研究ではイスラーム学の視点を活かしつつ地域研究の立場から学的貢献を目指したい。

【研究の内容・方法】

本助成を受けて、移住活動の背景、サイイド(預言者ムハンマドの子孫)と社会階層、ハドラミーの神秘主義教団アラウィー教団を主軸に、タンザニアのザンジバルで臨地調査(2009年9~10月)を実施した。

ハドラミーの移住活動は、イスラーム勃興(紀元7世紀)前から行われていたと考えられるが、本研究で対象とするハドラミー移民の多くは、19世紀にオマーン人スルタンが当地域一帯を支配下に置いて以降にザンジバルへ渡った者の子孫である。そのため、移住者に関する情報がよく記憶されており、中には移民の第一世代のハドラミーも存在する。そこで、移住にいたった経緯、移住先への定着の過程、現地人との同化レベルについて、現地イエメン人協会メンバーへの質問表配布とライフヒストリーの聞き取りを行った。

次に、サイイドを中心とした血統と社会階層の問題である。ハドラミーの出身地であるハドラマウトは、所属部族や職業に応じて序列化されており、社会階層の最上部層に位置するのがサイイドである。これらはハドラミーが移住する過程で変質していったが、ザンジバルにおいてはサイイドか否かという、幾分単純化された状態で残っている。サイイドは他のハドラミーとは異なって、口伝、またはマニュスクリプトの形で系譜や家系史を積極的に記憶しているため、各氏族の内部に伝わる家系図とハドラミー・サイイドの父祖の伝承集を記録・収集し、合わせてインド洋の他地域に移住した家族メンバーとのつながりも記述した。

最後に、アラウィー教団に関してであるが、この教団の活動はハドラミー・コミュニティの内部に限定された秘技的なものではなく、教育や文化活動を通じて、広く一般ムスリムを巻き込む形で浸透している。調査では、活動実態と現地社会との関わりについて、シャイフ(指導者)に対するインタビューを行った。

【結論・考察】

ザンジバルにおけるハドラミー移民のネットワークの実態は、サイイドか否かで2つのタイプに分かれていた。アイデンティティ面では異化と同化、母国やインド洋諸地域との繋がりでは強化と分断である。

移住活動は、故国での経済的困窮・部族闘争を原因としていた。移住先では商業的成功者が社会進出し、経済面ではサイイドとの順位逆転もある。また、母語がアラビア語から現地語のスワヒリ語へと置き換えが進み、自らをハドラミーよりザンジバル人する者が増えるにつれ他地域との繋がりも希薄化している。

一方で、サイイドは現地人と同化せず、アラブ性を保っていた。各家庭には預言者からの家系図があり、イエメンの氏族長は構成員名を記した写本を更新し、全氏族の系譜をインドネシアの組織が管理している。また、アラウィー教団は儀礼・教育を通じムスリムにサイイドの偉人性(同時に異人性)を浸透させていた。

このように、預言者の一族を順にカバーする巨大な血統管理システムが、インド洋海域の全域に散らばるサイイドを結びつけ、そのネットワークに乗って彼らは現代でも人や物の移動を行っていたのであった。